

3年 音楽科 課題No.5 能 楽






3年 [] 組 [] 番 氏名 []

*日本の伝統芸能の一つの「能」は、総合芸術としての特徴を理解し、授業（鑑賞）に生かせるように学習しましょう。 【関心・意欲・態度】


23下P40「能」・口絵5を見ながら、またはインターネットなどを活用して
【 】に当てはまる人物名や言葉を入れながら学習しましょう。

能の歴史 復習

歴史の授業で学んだ人物たちです！

- *奈良時代に渡来した散楽（曲芸や奇術）が発展したのが「猿楽」
- *平安・鎌倉時代に猿楽はものまね・寸劇などのこっけいな芸に成長していった。
- *さまざまな芸能が結びついて鎌倉時代の終わりから南北朝時代にかけて成立したのが『能』・『狂言』。
- *室町時代に猿楽をやっていた親子（父・観阿弥、子・世阿弥）を見た18歳の
(1333~1384) (1364~1443)
【 **足利義満** 】  が世阿弥に一目ぼれをし、その後、絶大なる支援を受けて猿楽は発展した。
(1358~1408)
- *安土桃山時代には、【 **織田信長** 】  ら、特に【 **豊臣秀吉** 】  などの権力者に
(1543~1582) (1536~1598)
バックアップされて猿楽は地位を確立していき、能装束もゴージャスになった。
- *江戸時代には、【 **徳川家康** 】  などの徳川将軍によって猿楽は「式楽」に定められ、
(1542~1616)
幕府の儀式の時に演じられる格式高いものになった。
- *明治維新により幕府の後ろ盾を失い、猿楽は一時衰退しかけるが、【 **岩倉具視** 】  ら
(1825~1883)
によって猿楽は「国劇」として認められ、『能』と『狂言』は「能楽」と呼ばれるようになり再び人気を集めていく。能楽は文化人や政治家のたしなみとなっていった。

豆知識 『能』と『狂言』のシテとワキ

- *能を一言で言うと「【 **600** 】年以上の歴史をもつ【 **歌舞** 】劇」 
- *【 **能** 】の特徴は主人公がおもに「死んだ人」。この世に未練のある人が多い。
【 **能面** 】をかけている。人間の深層心理を扱うものや天下泰平を ^{ことほ} 寿ぐ神さまのモノ
など。

能では、主役のことを【 **シテ** 】、相手役のことを【 **ワキ** 】と呼びます。

シテ → さまざまな主人公を【 **謡** 】【 **演技** 】【 **舞** 】で表現する最も重要な演者
威厳のある神・恋慕にひたる女性の幽霊・知略と勇気に秀でた武士・恐ろしい地獄の鬼・美しい舞を舞う天女など。

ワキ → 面をかけてずにシテの相手役を演じます。

- *【 **狂言** 】の特徴は主人公がおもに「生きている人」。
せりふ中心のコメディ劇おもに素顔で登場する。鬼や精霊役の人は「^{せいれいやく}狂言面^{きょうげんめん}」をかける。

能の音楽

「地謡」は通常【 8 】人で編成され、

シテの心理や情景などを描写した謡うたいを担当します。

後ろ中央に座る人が「地頭」と言ってリーダー的存在。

「囃子」は【笛（能管）】、【小鼓】、【大鼓】、【太鼓】で編成され、謡の伴奏や舞の音楽を担当します。



こつつみ *小鼓



皮を湿らせて微妙な音の違いを調整、【 柔らかい 】音が出る。

チ ⇒ 甲（カン）の小さい音。薬指1本で打つ。左手は握る。

タ ⇒ 甲（カン）の大きな音。薬指と中指の2本で打つ。左手は握る。

プ ⇒ 乙（オツ）の小さな音。人差し指1本で打つ。左手は扱う。

ポ ⇒ 乙（オツ）の大きな音。全部の指で打つ。左手は扱う。

（扱う ⇒ 革を打つ瞬間まで握り、打ち終えた直後に速やかに緩める動作）

おおつつみ *大鼓（おおかわとも言う）



右手に指皮をつけて打つ。

革を炭火で焙じてよく乾燥させ、

硬質な音を出す。革を火であたためて...

強弱で打ち分ける。



*笛（能管）

かん高い音とメロディーより、リズムを主体とした演奏法が特徴。

*太鼓

人間以外（精霊や魂の役）の存在が登場する曲で演奏。



能面

おもて面おもてをかける（照ルと曇ル）顔より少し小さく顎が少しはみ出して見えるのが良い

微妙な角度や向きによって、役の感情が表現される

て照ラス ⇒ 顔をやや上に向ける

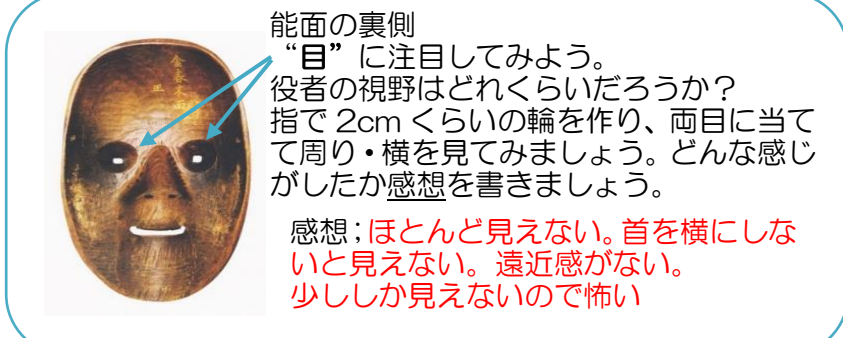
【 笑っている 】ように見える

くも曇ラス ⇒ 顔をやや伏せること

【 泣いている 】ように見える

面の種類

*翁・尉・女面・男面・鬼神など



能 舞 台【 】に名前を書きましょう



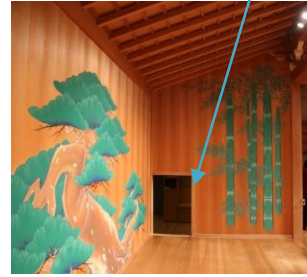
裏鏡の間
(揚げ幕の裏)



揚幕と橋掛かり

【 鏡板 】

老松が描かれ
神木としてまつられている。
音を反射する役割もある



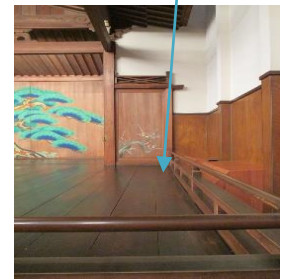
【 切戸口 】

地謡の出入り口
板壁には竹が描かれている



【 揚幕 】

演者・囃子が登場
揚幕の奥の
「鏡の間」は
神の世界
本舞台は
人間の世界と
見立てられる



【 地歌座 】

【 目付柱 】

面をつけた演者が位置を確か
めるための目安

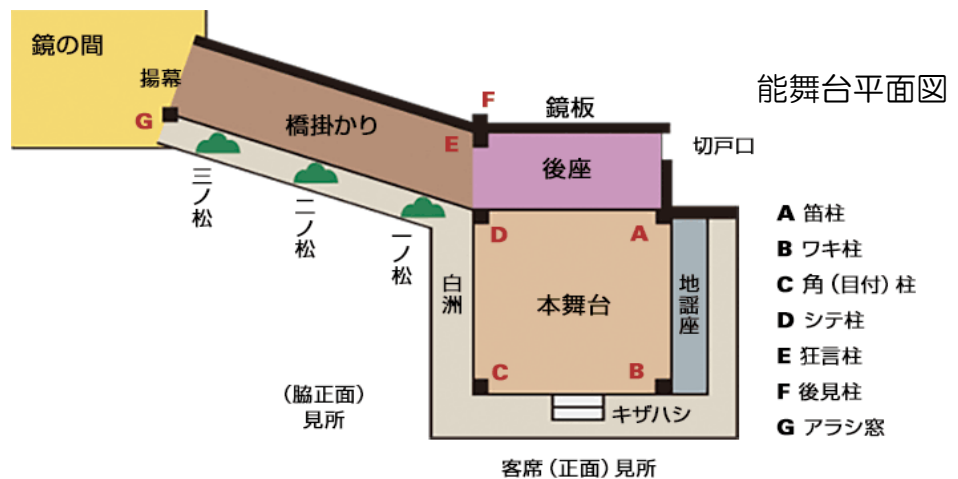
【 本舞台 】

三間(約 5.5m)
四方の正方形の広さ



【 橋掛かり 】

登場・退場・第2の舞台
本舞台に向かってなだら
かな上り坂になっている



提出日 5月22日(金)